



地方創生アドバイザー

竹村 潤一

特集

矢板創生を加速化させる人たち

地域おこし協力隊

高橋 潔



【シリーズ矢板創生】第1回 ひとの流れを変える

【シリーズ矢板創生】では、平成28年1月に策定した「矢板市まち・ひと・しごと創生総合戦略」に掲げた基本目標の実現に向け取り組んでいる施策について、現状や背景、課題などを織り交ぜてご紹介します。

矢板市の置かれている現状を皆さまに知っていただき、市民・行政が一丸となって「矢板創生」の実現に取り組むきっかけになればと思います。

地方創生アドバイザー 「経験を生かして地方創生」

【プロフィール】
 名前 ^{たけむら} 竹村 ^{じゆんいち} 潤一
 年齢 47歳（昭和44年10月12日生）
 住まい さいたま市
 仕事 (株)JTB 関東 営業推進部 地域交流事業
 担当マネージャー・観光開発プロ
 デューサーとして宇都宮に駐在

「地方創生アドバイザー」とは、国が創設した地方創生人材支援制度の1つで、地方創生に積極的に取り組む自治体に対して、国家公務員や民間人材などを「地方創生アドバイザー」として派遣し、専門的な立場から、その地域に応じた地方創生・地域活性化の処方箋づくりを支援するものです。

4月から県内初となる「地方創生アドバイザー」に就任した竹村潤一さんにお話を伺いました。

「アドバイザー」に応募した理由は何ですか？



2008年に(株)JTB 関東に入社して以来、観光を基軸とした「交流人口の拡大」および「滞在・滞留時間の拡大」による地域活性化事業に携わってきました。

全国の自治体で地方創生総合戦略を策定し、多くの市町村が観光による地方創生を掲げています。

矢板市でもスポーツツーリズムなど、地域特性を生かした観光施策を進めていることから、これまでの経験を生かして、その推進の中核的な役割を果たせると思い、応募しました。

自らの専門分野・得意分野を生かして

実績としては、2014年から、栃木県の観光施策において統括プロデューサーという立場で、観光振興を県および県内全市町とともに進めてきました。

その結果、来年の「JR デスティネーションキャンペーン」の誘致に成功し、現在それに向けたコンテンツづくりと受入体制の整備を全県下挙げて進めているところです。

近年は、栃木県を中心に観光施策に携わってきたので、「全国から見た栃木県」、「栃木県全域を見通したときの矢板市の立ち位置」というものを、旅行会社・ヨソモノの視

点から客観的に見るができると思います。

また、県や他の市町でさまざまな地域活性化業務に携わった経験を生かし、アドバイザーとして適切な助言ができればと思っています。

自治体の観光振興などに関係する主な経歴

- ・日光～会津観光軸元気再生プロジェクト」アドバイザー
 - ・那須町「総合運動公園基本構想策定委員会」委員
 - ・栃木県「観光振興施策プロデュース業務」統括プロデューサー
 - ・栃木県「観光地活性化人材育成事業」プロデュース など
- 観光における交流人口の増大、プロモーションの分野において、地域活性化業務のプロデュースに数多く携わった実績あり。

具体的に取り組みたいことはありますか？

矢板市では、総合戦略の基本目標の1つに「来てもらう、住んでもらう人の流れをつくる」を掲げています。

市が施策として進めているスポーツツーリズムや観光交流、シティプロモーションなどを通して交流人口の増加を図り、市全体の施策および地方創生関連事業を推進するため、専門的な立場からアドバイスをしていきたいと思っています。

具体的には、今まで培ってきた経験を生かし、観光施策の大きな役割の1つでもある「地域資源の発掘・磨き上げ」を通して、地域に人を呼び込むコンテンツの開発を行い、交流人口の拡大を図りたいと思っています。

また、地域の観光人材育成や機運醸成を図るためのワークショップを多くコーディネートしてきた経験を生かし、地域内での観光振興に向けたネットワークやコンソーシアムづくりについても取り組んでいきたいと考えています。

※コンソーシアム…ある目的のために集まった組織や人の集団のこと



アドバイザーとして講演している竹村氏

地域おこし協力隊 「泉地区の活性を目指す！」

【プロフィール】
 名前 ^{たかはし} 高橋 ^{きよし} 潔（愛称：キヨマン）
 年齢 38歳（昭和53年12月9日生）
 出身 矢板市東町
 仕事 地域おこし協力隊
 （泉地区の活性化推進）
 株式会社 HUBSUN 代表取締役社長

「地域おこし協力隊」とは、矢板市の行政課題や地域の課題を解決する上で、必要な人材を確保するため、矢板市に移住し、地域資源の発掘や地域ブランドの開発・販売・PRなど、地域おこしの支援をする方のことです。

4月から矢板市で3人目となる地域おこし協力隊員として、高橋さんが就任しました。高橋さんは「泉地区の活性化推進」を目的に、地域おこしに取り組んでいきます。

「地域おこし協力隊」に応募した理由は？

2015年夏から、将来ワイン作りをするために葡萄の作り方を学ぶため、住まいのある東京と矢板市とを往復する生活を始めました。あるとき、矢板市で隊員の募集を知り、私自身も応募条件に該当していたことや募集内容から今までの経験が生かせると思い、応募しました。

隊員になる前はどんな仕事をしていましたか？

22歳から13年間、会社員として営業、人事、広報、経営企画といった部署を経験してきました。もともと東京と地方をつなぐ仕事がしたいという漠然とした考えがあり、



恵比寿ガーデンプレイス Studio Octo でインターネット配信サービスを手掛けている

「つなぐ」という点でインターネットを活用して、企業向けセミナーや会議、社員研修などをウェブ配信する会社を2014年秋に創業しました。

会社を運営しながら協力隊として活動するのは珍しいパターンと思われるかも知れませんが、実は隊員には副業が認められていて、このような働き方をしている協力隊員は全国にも結構いるんです。主に芸術家やプロスポーツ選手などといった職業の方で自身をPRの材料にしているようです。私の場合は自身がPRの材料になるわけではないので、これまでの経験や現在の仕事を十分に活動に取り入れていきたいと思っています。

これから取り組みたいことは？

泉地区を中心とした中山間地域の活性化が私の活動テーマです。基本的に楽しいことが好きなので、楽しみながらやっていきたいと思っていますが、「新しい時代の生き方を一緒に考える」という活動理念を根底に持っていたいと思います。なぜなら、これからの社会は不確実であり「正解よりも"納得解"が求められる時代」と言われているからです。

ちょっと堅苦しくてすみません。ちなみに、この納得解を私を例にした演習問題にすると、東京で会社を運営しながら矢板市で協力隊という活動をどうやって並行して行うのか？という問題になるのでしょうか。

なぜうまくいくと思ったのかというと、1つは私自身に似たような経験やノウハウがあったこと、もう1つは優秀な社員がいたからです。そして、最も重要な



新たな地域資源・地場産業の創出に取り組む

点となるのが進化した情報通信技術（ICT）を活用できることです。会社の中での私の役割は大半がマネジメントで、それらの全てを日々、ICTを用いて管理しています。その情報を基にICTを用いて社員とコミュニケーションを取ったり、指示を出したり、お客さまと打ち合わせをしたり、必要があれば2時間足らずで東京に戻ることが出来る場所にいるからです。それらを掛け合わせることでうまくいくと思う納得解を得ることができました。

今までの仕事をしながら隊員になることについて、両親とはかなりの時間に渡り衝突しました。すぐに納得、理解してもらえとは思っていませんでしたが、衝突の理由は正解や不正解という解では結論が出せないことだったからなのだと思います。皆さんと、楽しくたくさん納得解を見つけることで地域の活性化に繋がっていきたく思いますのでどうぞよろしくご意見申し上げます。